各期の活動

悔いのない青春を追求しよう!!

1期　新島章一

陸上競技部発足以来、50年の歳月が流れました。思えば、昭和28年の春、入校教育終了後の５月１日、一般教養学科の授業開始とともに、放課後、訓練の一環としての「選択体育」と称する形式により、借物の久里浜工業高校グランドにおいて、専任指導官の下で数名による同好の志の集いから産声をあげました。学生の自主を主体とする待望の校友会（課外活動の運動部・文化部）が発足したのは、同年11月上旬（？）であり、これ以降が正式な陸上競技部の活動となります。

初陣を努めた４年間の創設期を概述しますと、校友会の運動部全般の最大の難事は、当時の学生心得の規定に基づく課外活動では、全学生が何れかの運動部へ参加しなければならないとする、全員参加の義務化と、年々増加する学生数に応じた各々の部が使用する運動場や道具類等が競合する際限のない不足でありました。

また、陸上競技部の難事は、久里浜の２年間は砂利、小原台の２年間は関東ローム質土壌のため、風雨に水路や傾斜などで、100m水平・平坦な直線面が取れないグランド状況と、軍隊のスポーツとは相容れないとする思想的偏見に基づく対外の各種競技団体への加盟問題や入部



１期生卒業前の記念写真
最前列左から１期生５名：大村、内海、新島、伊藤、蔬田
２列目左から３期生：戸川、２a期生４名：田熊、野々村、鍬田、杉、３期生：中川
３列目左から３期生：樫山、唐崎、牧田
最後列左から３期生２名：平原、岩下、４期生４名：浅田、宍戸、冨澤、中富

希望者の過少等等々でありました。然しながらその成果は、保安大学校の公式な対外試合の初参加の栄を担って、28年11月３日の市民選手権大会を皮切りに、29年11月市民選手権大会、29年12月横須賀市内駅伝、30年９月市民大会兼ねて都市対抗予選、30年12月横須賀市内駅伝、31年５月市民選手権大会、31年９月神奈川県大学陸上競技選手権大会へと歩を進めることができました。

その成績は、各期の部員全員が与えられた条件下において最大限の努力で最善を追求したことにより、入部以来の自分の種目ごとの夫々の記録を更新させ、トラック・フィールドの数種目に優勝するほか、その他の種目に数多く６位以内の入賞を果たしました。（細部：校友会誌32年３月発刊の運動部々誌創刊号）

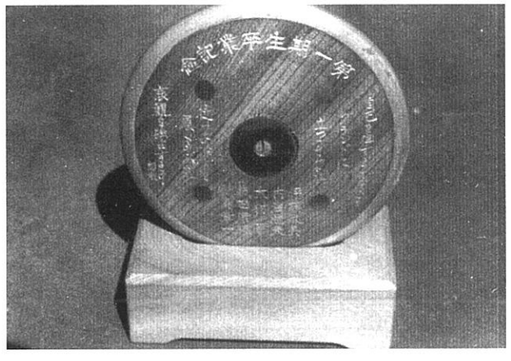
一言で創設期を総括しますと、『市内駅伝では馬堀中学校に馬鹿にされつつ、国立「小原台高校（？）」並みのレベルまで育成』することができました。そして32年３月、１期生は「競技用の円盤」に部活動の鉄則（指標）刻み託して、２期生（主将・鍬田氏）以下にバトンタッチしました。

卒業後は、その数年後の箱根駅伝初参加時は感激して北海道の部隊から応援に参加したり、OB会理事の方々の話や、現役部員とOBの唯一の架け橋である部誌「走跳投歩」や、若干の現役部員も参加するOB会総会時などを通じ、逐一、学校施設の改善状況や関東IC参加、関東理工科系大学対抗の継続的な優勝等々部活動の進歩・活性状況を承知することが出来、その充実・発展ぶりを喜んでおりました。そして定年数年後の平成３年秋、井坂先生のお招きにて卒業後34年ぶりに初めて母校を訪れる機会に恵まれました。そこで、400mの正規のグランドや基礎体力つくりに適した体育館等学生舎を含む全運動施設を現地・現物で拝見でき、話には伺っておりましたが正に夢のようでありました。

この小原台の景況は、前述の「校友会誌・創刊号」の中で、「運動部専任委員としての所感」の項の末尾ごろに記した“……唯、願うことは「学生隊がオリンピック村の縮図であれ」という事であり、……”との当時の夢のような祈願が叶い現に成就した事にほかなりません。この環境は、他の大学に比し、教育・訓練・行事などの特性的な制約はあるものの、それを除く全ての環境条件においては格段と恵まれており、陸上競技部を始めとする全運動部の「徳育」と「体育」の環境は、日本一であると確信します。

また、OB会の分野に関してですが、防大陸上競技部OB会は、昭和36年８月、陸上競技部OBとして初めて防大指導官に着任した２期田熊氏（46．６．14殉職、創部25周年記念誌「走跳投歩」を参照）を中心として、３期牧田氏、５期星野氏等の御努力により、１期生卒業５年後の昭和37年６月１日に発足しました。爾来、時代の流転に応じ、昭和に１回、平成に２回のOB会の規約改正を行って参りました。そして必要にしてほぼ十分な多数期が定年を迎えた平成14年、当時のOB会長冨沢氏の時、過去においてOB会の事務を全て現役OBの方に頼っていた役員体制を退官OB主体へと抜本的に見直したOB会規約の改正が行われました。この分野も、今後の在るべき姿へと大変身することが出来ました。退官OBの方々には、時代に応じたOB会の在り方や運営に関し現役OB時代において大変なお骨折りを頂きまして、誠にありがとう御座いました。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

このように立派に成長した今日がある防衛大学校「陸上競技部」と「陸上競技部OB会」は、なんと言っても歴代部長を始めとする学校関係者の各時代特性に応じた適切かつ暖かい御高配・御指導・御鞭撻に基づいた、磐石な基盤が継続されていた事がその大前提にあります。そして、各期主将を始めとする在校部員の努力と、これを支える現場における的確な助言・教導と物心両面に及ん



だOB先輩諸官による支援の賜物であり、更にはこれら3者の三位一体化した御苦労を積み重ねられた50年に亘る星霜を経ての結実で在ります。

改めて、見事に成長した今日があることをお慶び申し上げるとともに、この間における各期の主将を始めとする在校部員の並々ならぬご努力は申すに及ばず、これを援助して頂いた学校関係者とOB先輩の方々等、関係者による幾多の輝かしい功績は絶大であり、賜りましたその御尽力に対しまして、ここに深甚なる謝意と敬意を表する次第であります。

加えて、当初「保大」、事後「防大」陸上競技部創設期～初期において、アプレ・ゲールと言われ放しで退廃的傾向の我々のため、大変な御心痛・御心労を煩わせつつご尽力を賜りましたが他界されました、初代部長「保柳睦」氏、2代部長「伊藤直」氏、3代部長「鶴留和男」氏、及び、久里浜と小原台のグランドにおいて共に活躍され、自衛官として職務はもとよりOB会活動においても多大な御功績を残されましたが、在職中に道半ばに若くして他界されました2期（陸）「田熊嗣利」氏、7期（陸）「及川晃一郎」氏、12期（陸）「土屋健一」氏、12期（海）「鈴木公男」氏、27期（陸）「矢塚寿夫」氏、38期（陸）三宅和幸」氏、41期（陸）「平宇太郎」氏、以上の方々の御柱に対しまして、防大陸上競技部関係者一同は改めて、生前における数々の御功労に対し衷心より深謝申し上げますとともに、謹んで安らかなるご冥福を心よりお祈り申し上げる次第であります。

この機会に、老人の余計なお節介とも思いますが、陸上競技を志した、或いは、これから志す「現役OB」と「在校部員」の方々に対しまして、夫々申し添えたい事があります。

1　現役OBの方々に対しましては、在校部員と共に活動支援できる専門コーチによる継続的な現場指導の強化であります。当然のことながら、OB会の主たる目的は、先ず防大陸上競技部の更なる発展のため、物心両面にわたる支援にあります。この支援に関し、過去において最後に残った小さい事ながら大きな意義のある問題は、在校部員の心の問題を含む現場に直結する継続した専門のコーチ的な教導支援であります。この件は、人事が絡む難しい問題でもあります。現役OB時代には何度となく微力ながら口頭にて依頼して参りましたが、現実には空白の時機が相当ありました。今後においても、若い指導教官等の副業として、可能な限り「走跳投歩」の各OBが同時に、且つ、継続的に補職され、「物・心」の現場支援態勢の強化が望まれます。このように本件が施策的に担保されることにより「学校・部員・OB」の三位一体化した理想的な「現場体制」が確立すると思います。

50年前の「オリンピック村」と同様、今回は50年史の紙面をお借りして、“古希の夢”を再び祈願いたします。

2　在校部員の方々に対しましては、すでに創部25周年の「走跳投歩」誌に記述した①スポーツを志す意義、②陸上競技を志す鉄則（指標）に加え、③陸上競技に取り組む原理・原則・及び原点であります。

古代オリンピックを見ても分かりますように、陸上競技というスポーツは、陸上において人間が生きてゆく上に必要とする基本的な行動・動作を競技化したものです。優劣・順位を決定するに当たっては、全種目とも単純・明快で、当初は視覚、その後は物理的な計測記録のできる、本来個人的なスポーツであります。

時は流れ、現代における青春時代の重要な仕事の一つは、生きるために必要な自分の潜在能力を探求・開拓、且つ、発展・向上させることであります。また、学問、芸術やスポーツ等の能力向上に近道はありません。従って、能力向上に関しての、悔いのない最善の方策は、日々自分の能力の限界に挑戦しつつ、逐次段階的な、且つ、反省・前進や試行錯誤などを繰り返す反復演練の積み重ねしかありません。悔いのない最善の方策を、別の言葉と見方で言えば、“何事も努力する過程が大切であり、結果は後からついてくる”ものです。

この日々地道に精進する、自己への真剣勝負の「挑戦の強弱」と、その「継続の有無」が能力向上の『鍵』です。しかし、人間本来「労を惜しんで易きにつく性」を持っています。それが故に、人生において万事を成し遂げる全てに共通、且つ、全てに優先する原点は、先ず何事にも日々「自分に打ち克つ強靭な闘争から始めることが必要不可欠であります。即ち、“敵は我に在り、『克己闘魂』”こそ、悔いを残さない祈願成就の真髄であります。

陸上競技を通じて培われた様々な識能や資質、就中、この取り組み方は卒業後の自衛官としての勤務において、どの職域でも、また、どのような業務でも、更には如何なる任務においても目標を達成させる原点に通じております。はたまた、陸上競技を志すことは、自ら生きる基本を鍛錬することに通じ、自己の能力の限界に挑戦する道は人生の生きる道に通じております。

優しく、且つ、強い絆と品の良い我らの防衛大学校陸上競技部は、永遠に不滅であります。小原台のグランドにおいて素質の有無に拘らず陸上競技を志したものが、“我が青春に悔いなし”そして“我が人生に悔いなし”と口ずさみ続けることを御祈念申し上げ、50年史に贈る言葉とします。　（陸・新島）

横須賀市内駅伝において馬堀中学校に負けたことは、OB会等においても大した話題にもなることもありせんでしたが、1期生が退官後のOB会や総会時などで度々話題になり、その都度、誰が……と捜索するようになりました。横須賀市内駅伝において、馬堀中学校に負けた「原因の本人」が、50年を経た本稿作成時に初めて明らかになりました。「疑うは足元から」とは正に事実でありました。

平成元年の定年退官以降において、2期～4期の方々を対象とした悪ふざけの捜索活動（時には陸幕長室にまで入り込む等々）に対しましては、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。　（陸・菰田）



防大陸上競技部の50年史によせて

2期　鍬田利夫

1　実力の証し？

当時、主将として一番辛かったことは月曜日の朝、学生食堂で土・日曜日に行った各運動部の活動状況の報告です。陸上部が活動していることを広報するにはこの場を利用するのが一番でした。しかし成績が芳しくなかったので、いつも汗顔の至りでした。特に横須賀市内駅伝大会の時は馬堀中学に負けたわけで、新聞にもでているので一応報告しないわけにもいかず、「堂々第２位」とやったものですから、食堂内爆笑の渦で、まるでお笑い芸人みたいで大変恥ずかしい思いをしました。当時は陸上部員も少なく、部員だけではメンバーが揃わずに部員でもない学生をメンバーに入れての参加で、あのような成績も仕方がなかったのですが、言い訳はしませんでした。これも陸上部の古い歴史の一駒でした。

2　グランド整備！

また、グラウンドの整備で天気の良い日に、数少ない部員が円匙などで懸命に整地し綺麗にしたところを、雨上がりの翌日に車輌の操縦訓練で滅茶苦茶に荒らされ、担当教官に噛みついたこともありました。

当時のグラウンドは、少し下り勾配になっていたこともあり、100mの記録会をする時は太陽を背にしてやると良い記録がでたものです。

3　学連加盟への道！

当時、３期生の樫山君が「インターハイ走り高飛び２位」の優秀な成績を持つ唯一の大学生レベルにある部員で、防大もなんとか関東学連に加入してインターハイ等の競技会に参加させてやりたいと考え、学連加盟打診のため東京お茶の水にあった岸記念館に何度か足を運び、学連事務局のメンバーに会って要請した記憶があります。

あの頃は60年安保騒動前の世情が大変騒がしい時期で、防衛大学校は大学にあらずということで学連加盟は難しい雰囲気でした。

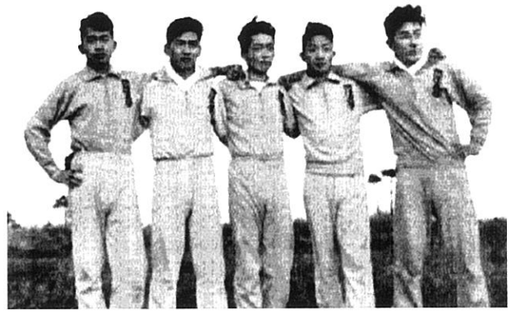
しかし、神奈川県下の大学対抗競技等の実績もあり、翌年３期生の時には正式に関東学連に加盟出来たと聞いて喜んだ記憶が、懐かしく蘇ってきます。その後、僅か数年で箱根駅伝に出場できたのだから驚きでした。現在では、正月の大イベントとしてテレビ放映されている大学箱根駅伝の現状を見る時、後輩達は大した事をやってのけたものだと感心し、我が陸上部の底力をみた思いがしたものです。

4　恩師を想う！

当時の陸上部の指導は、監督の保柳先生のほか鶴留先生とコーチの井坂先生がおられました。保柳先生は、地学の高名な学者ときいておりましたが、お忙しい中いつも部員達のためにグラウンドにお出で頂き、文句も言わずニコニコしながら、レベルの低い学生達の練習を見ておられました。当時の部員達にとっては、保柳先生がグランドに来て頂けるだけで大きな励みになったのを想い出します。

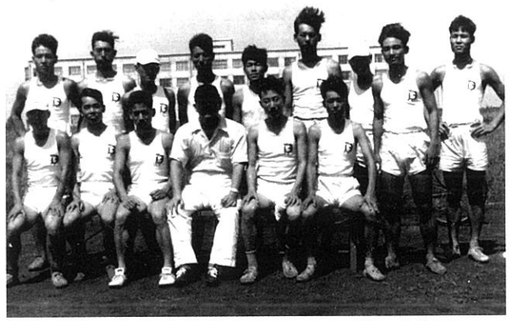
終わりに、卒業後、戦車での訓練中に殉職された田熊嗣利君（２期・長距離）が、黙々と練習していた姿を偲び、陸上競技部創設50周年の機会に改めて追悼の意を表します。











3期生は基盤確立の時代

3期　樫山　貢

3期生が4年生の時期は、一言で言えば、陸上競技部としての部活動の基盤を確立した画期的な時代であった。

それは、防大陸上競技部が、関東学生陸上競技連盟に加入し、本格的に活動しうる端緒となった転換点であった。

ただし加盟の原動力は、先輩＃1＃2特に2期生鍬田主将等の熱意と地道な努力の賜物で、3期生は、その成果を幸運に頂いたものである。

S33年わが部は、関東学生陸上競技選手権の2部に初出場した。国立競技場は、夢にまで見た檜舞台だった。

主将の私は、走り高跳で優勝、三段跳で3位（1回目の跳躍で捻挫、後棄権）で、何とか主将としての重責を果たし、ほっとしたものでした。

3期生は、小原台1期生で、台上は、泥土と砂嵐が吹き荒れ、グラウンドは、逐次拡張中で凹凸だらけでした。砂場も3回位移動し全員で海岸まで砂取りに行って、整備したものでした。

中・長距離陣も、地道に努力していましたが、成果は、今一でした。一期生が、三年生の時浦賀半島駅伝があり、わがチームは、小泉首相の母校の馬堀中学に負けた程度の実力でした。それが、＃5期生が4年生のとき、箱根駅伝に初出場の快挙を為しとげたのは、＃4冨澤主将等の先見的努力と、＃5青山主将の優れた統率力と厳しい練習の結実であった。

初出場の当日私は、北海道の部隊から応援に駆けつけた。そして伴走車「当時ジープ各校1台」で往復全区間声援の貴重な体験をさせて貰った。

1区は、＃7尾辻選手（現厚生労働大臣）最後尾ながら必死に食らいついていた。その奮闘ぶりは、現在の政治家としての活動にも伺えます。箱根の最難関の5区山登りは、＃5生青山主将自ら重責を荷い見事完走した英姿は、今もって忘れることはできません。

最後に、蛇足ではありますが学生諸君に、私事ではあるが付言したい。＃3という神代の時代の防大記録の存在「三段跳14m38cm」である。私自身走高跳は、インターハイ2位の実績はあったが、三段跳は、防大入校してから神奈川大学対抗選手権の点数稼ぎのため急遽始めたに過ぎない。もっとも高校時代から、指導者も練習仲間もなく一人で織田幹雄著「陸上競技」を、唯一のお手本として練習したのみである。要は、三段跳は、両足使う、よって両足を鍛えればよい。因みに、私は、100m12秒を切れず走幅跳も、両足6mそこそこの中学生程度の力しかなかった。

本質を捉え、ビジョン：ポリシーを確立して努力すれば、必ず成果はでます。

それは、卒業後任官等し、任務・職務を遂行する上で、充分生かされる。間違いない。



最も弱かった時代

4期　冨澤　暉

4期生で陸上部に属した者は5人、そのうち一人が2年になる時に退校して、卒業したのは4人である。おそらく陸上部の歴史の中で最も人数の少ない期だったと思う。その4人の中で一番先に入部した故をもって私が主将になった。1959年の春であった。

その年の関東インカレ第2部では、東大に続いて防大の旗が2番目に入場したのだが、それは前年度に樫山主将が走高・走巾・三段跳びで大量得点をしてくれたお蔭であった。それ以降当分、インカレ2部で得点の出来そうな選手はいなかった。

「箱根への挑戦」は、2期の鍬田主将からよく聞かされていた話だが、私はそれを思い出し「そうだ、これを目標にするしかない」と考えた。

横須賀市一周駅伝の最終区間で防大のエース（後に退校した4期生）が馬堀中学のエースに抜かれ屈辱の2位になった時から2年半、わが長距離陣は5～6人しかおらず、まだまだ弱体であった。「これは長期計画だな」と思ったが、調べて見ると予選通過水準はそれ程高くもない。「ともかく予選会に参加しよう」と決めた。

校内競技の上位入賞者達に「箱根に出場するから入部してくれ」と頼んでまわった。5期の青山主将はこの時に入部してくれた一人である。4期の奈良崎君のように「入部はしないが、予選会には出ても良い」という人もいた。私自身は情けないことに膝を壊して走れなかったが、何とか12～3名の選手を鍛錬して練馬での予選会（10マイル）に出場した。皆よく健闘してくれて、上位10人の平均タイムは59分と少々の第7位、第5位（通過）は神大で57分50秒台、第6位は慶応で58分台だったと記憶する。「あと1分一寸だ。がんばれ」と言い残して私どもは卒業した。

久留米の幹部候補生学校で「予選通過」の報せを受けた。青山君が「青鬼」と呼ばれていると聞いていたので「流石に青鬼」と感嘆したが、本当に嬉しかった。

当時の箱根駅伝では各校に1台の伴走車がついていた。その車に朝倉監督と井坂コーチと前年度主将たる私が乗った。読売新聞社前をスタートして1区・尾辻は、彼の専門距離たる800米あたりまでは上位にいたが、新橋では既に最後尾となっていた。



■左から大戸（フィールド・短距離）、宍戸（長距離）、冨澤（中距離）

茅ヶ崎の付近で路上の神奈川県人が「立教がブレーキ、防大、追い抜け」と応援してくれる。確かに立教のものらしいジープがちらりと見えた。しかし、それも間もなく消えた。

5区の山登りは青山主将であった。宮の下あたりか、「青鬼」が必死に駆け登り、我々は号令をかけ気合を入れていた。まだ峠には遠く、更にゴールまでの下りも長い。その時、車に積んでいたラジオが次のように伝えた。

「ようやく、暮れなずまんとする箱根路であります。先程までの喧騒はどこへやら、ゴール地点はすっかり静かになりました。只今14位の法政大学がゴールに入りました。もう一校、防衛大学が残っておりますが、本日の中継はここで終了させて頂きます」

しかし、青山本人だけではなく我々もまた一体となり頑張り続けていたのである。

往路、7時間40分ぐらいかかったかと記憶する。帰路も同じようなもので、最初から最後まで最後尾であった。7期の中川主将以下が出場した時には、バスに乗って応援したが、この時の成績も同じであった。「ビリになるのなら出ない方が良かったのでは」と言われることも多いが、あれこそ我らが青春のハイライトであったと信じている。

青春の夢は更に膨らんだ。当時、郡山自衛隊に円谷幸吉という3等陸曹がおり、陸上競技マガジンでは日本陸上界の希望の星と紹介されていた。私は彼を防大体育室の助教に呼びたいと考えた。私が指導官として戻り、高校生に呼びかけ駿馬を集める。それを彼に鍛えて貰って、「防大を箱根で6位以内に入賞できるチームにする」。それが、2・3尉時代の私の目標であった。同意・応援してくれる上司も何人かいた。

しかし円谷は、東京オリンピックで私の予想以上の活躍をしたため、幹部となり、防大などにはとても来てくれぬ人となってしまった。そして私も、防大指導官志望を外され富士学校の教導隊勤務に回されてしまった。

我が青春の夢はここで費え去ってしまったのだが、夢は再び蘇る。2003年正月3日の早朝、私は防寒具に身を固め、小田原へと向かった。そして懐かしいOB会の仲間達と岡本学生（48期）の山下りを応援した。40年振りのことだったが、感動は同じだった。

50期以降の学生達が、またいつか、この老人達に感動を与えてくれることを信じ、なおも夢見る今日この頃である。



■三ツ沢競技場（1956年）　※神奈川5大学
最前列左から　新島（1期）、内海（1期）、保柳部長、鶴留先生、伊藤（1期）、大村（1期）
中列（中腰）左から　唐崎（3期）、鍬田（2期）
最後列左から　岩下（3期）、冨澤（4期）、中川（3期）、牧田（3期）、樫山（3期）、野々村（2期）、杉（2期）、菰田（4期）

回　想

5期　青　山　利　雄

44年前の今日、第37回箱根駅伝に防大陸上競技部が初出場し、主将として山登りの第５区（当時は小田原～箱根間24.7km）を走ったことを、懐かしく思い出します。

今でも年に１～２回は、「マイカー（プリウス）」で湯本からの５区を走っております。

平成16年秋、防衛大学校から次のような依頼がありました。平成16年度末を目途に防衛大学校資料館を開館する。その第４ゾーン：卒業生の国防や国際貢献へのたゆまない努力、貢献などを伝える「小原台を巣立って」の中で、学生歌の作詞者、逍遥歌の作詞者、留学生、人社系第一期生、女子第一期生と私の６名に映像インタビューし５分間の映像で上映する。私に対しては、防大時代の思い出、自分にとっての防大精神、箱根駅伝にまつわる話、学生たちへのメッセージについて映像インタビューするとのことでした。

平成16年12月22日（水）撮影を請け負った（株）日本テレビビデオの関係者など５名が自宅に来られ、２時間に及ぶ映像インタビューに応じました。当時の新聞、週刊誌の記事や写真もVTR撮影して行きました。その頃の先生、コーチ、先輩、同僚、後輩も映像として５分間の中に出てくると思います。

どのように編集されるか分かりませんが、資料館で、ご覧頂ければと思っております。

当時のマスコミには、私がスクラップしているだけでも報知新聞、読売新聞、日刊スポーツ、週刊朝日、ディリースポーツ、東京タイムスなどに出ております。

報知新聞からは、掲載された写真（立野団地からの上り坂での練習風景）を頂き、今も持っておりますが、版権の関係がありこの「50年史」には、掲載できないかと思います。

報知新聞に昭和35年12月22日（木）掲載された同上の防大チームの紹介記事、雑誌「小原台」（昭和36年１月号）に私が投稿した「箱根駅伝に初出場して」及び関東学生陸上競技連盟が昭和64年１月発刊した「箱根駅伝70年史」（615頁の大作）に同じく投稿した「箱根駅伝初出場」を、この「50年史」にも投稿しました。これらもご覧頂きたいと思います。

同期生には、膝を痛め主務になり、大きくなった部務を良くまとめ、予選会を始め箱根駅伝全般を見事に支えてくれた星野毅君、９区を走った東宏一君、10区を走った立石良文君、それ以外にも犬塚雅生君、神田順朗君（故人）、鬼頭良彰君、水越美知君、村谷進君、入江正武君、佐藤征生君、杉村守君がいた。また、当時の厳しいトレーニングに良く耐えてくれた同期生、後輩に大いに感謝します。

更に、箱根直後に陸上競技部OB会結成にご尽力頂いた第１期生主将で初代OB会会長新島章一氏、他の諸先輩に感謝しております。

OB会が、今後とも、現役を良く支える会であるように念じつつ、当時の回想とします。



箱根駅伝参加記念品



校友会活動の思い出

6期　中村　均

陸上競技部の６期生はほんの一部の者を除いて殆どの者が「どれかの運動部に入部しなければいけない」と先輩に云われ、何もないから取り合えず「走るの好きだから」程度の動機で入部してきたような感じでした。

また、１年の時は４年生が泣く子も黙る３期で、直ぐ上がヤンチャな５期で、学生生活全般を厳しく、徹底して絞られ、振り回されてきた、６期生の特性を持った「優しい、温厚な学生」のようでした。

練習、特に長距離の当初は、グラウンドもなく今日は校内、明日は観音崎、久里浜等、毎日団子になってただタダ走り整理運動をするだけでしたが、日体大出の新任コーチ井坂先生が着任されて、練習内容の充実はもとより自ら先頭になって走り、飛躍的に進歩をされたことが強く印象に残っております。

年に一度の夏合宿につきましては殆ど校内でしたが、3年生の時の高田駐屯地での合宿は忘れることができません。

北陸、雪国イコール涼しいなんてとんでもない、盆地的地形とフェーン現象で来る日も来る日も夜昼とも蒸し風呂に入った状態でありました。練習は午前の部は400m×20本とか、800m×10本のインターバルを、午後は近くの海岸で一時間の時間走、付近の道路20キロ走等、今考えますとコーチ、マネージャー、先輩の方々の計画、調整、指導についてのご尽力は大変な事だったと思います。

第37回箱根駅伝予選会突破、出場の当時の新聞の切り抜きを見ますと「国防の自衛隊が途中棄権となったら頼りない自衛隊を宣伝するようなもの」「１区尾辻（現厚生労働大臣）３区甲原（８期）を除いて防衛大にはいってから走り始めた選手ばかり」「防大生の走りはリズムとバネがなくひいき目にみてもアピールがかけているようだ」「まだ基礎技術もよくのみこめず22キロのつらさを知らない選手にしては案外のんき、こわさ知らずの無鉄砲さでただ出場したことに生きがいを感じているようだ」「敢闘精神で技術の不足を補うよりほかに闘い抜く道がない」等々ありましたが、心配された途中棄権もなく、

全員無事完走でき、青春の強烈な体験をさせていただいたことを当時の監督、コーチ、先輩、後輩の皆様に感謝いたしております。













ハコネヤマノボル

7期　中川浩佑

創部以来の夢であった箱根駅伝出場を５期の青山先輩が俊足の６期中川均７期尾辻を擁して初出場の金字塔をうちたてたのは昭和36年我々７期が２学年の春であった。この時小生も４区を走らせていただき感動しました。

次の年は６期中村均先輩指揮の下連続出場をめざしたが大エースである尾辻（厚生労働大臣）が３学年の５月に家庭の事情で離学し退部したのと我々７期の不調（高田部隊で行われた夏期合宿に３学年の部隊実習で各地の部隊から高田への集合にたまたま来襲した台風の影響で列車が異状に遅れ数十時間も列車内に缶詰状態になり今で言うエコノミー症候群となり数人が満足な合宿練習成果があげられなかった）等の不運が重なり予選落ち（予選会６位）の悲哀を味わった。その悔しさを晴らすべく我々７期の７人は何が何でも箱根路を走るんだと決意し下級生達にもその旨を伝え厳しい練習を行うことにした。

そこから本題である７人の侍達の物語が始まる。箱根駅伝出場のためならどんな苛酷な練習にも耐えると誓い合った。ある男は大隊学生長の候補に推されながら練習の妨げになるとこの名誉を辞退し、又ある男は健康診断で心臓弁膜症の疑があるとドクターストップがかかったが医務室の長に談判し例え死んでも自分が全責任を取ると誓約書を入れて走ることを許してもらい、又ある男は練習が厳しすぎて血尿を出しながら皆に隠して休日はもちろん定期試験中も隠れて砲台跡の猪物道を走ったものである。

そして幸運にも大援軍が現れた。37年の４月に２期の田熊OBと牧田OBが防大の指導教官として赴任され我々のコーチをして下さることになった。特に今は亡き田熊OBは新婚だったにもかかわらず毎日我々と一緒にグラウンドを走られ（決して駿人ではなかったがその箱根にかける情熱は我々を上まわる程であった。）休日にも一緒に練習して下さった。この様な状態を下級生も理解してくれて全員が良くまとまり練習の成果は着々と上がっていった。

そして運命の日、第39回箱根駅伝の予選会がやって来た。当日は小雨の中スタートと我々防大は先行逃げ切り（長距離走では考えられない暴挙？）で行ける所まで行くという作戦を取り最後は皆やっとの思いでゴールした。その結果学連の集計では神奈川大学に遅れること３秒差で６位となっていたが（今ではコンピューターで計時されすぐに結果がでるが、当時はコンピューターはおろか計算器もなく手書きと算盤で計算していた。）我々の名マネージャー（算盤１級）の計算では逆に２秒差で我が校が勝っていると抗議しもう一度計算し直してもらい学連も納得して神大とは２秒差で我が校が５位となり大逆転で念願の本選出場が叶った次第である。そしてこの快挙を諸先輩に報告するために（今では電話やメールで即知らせることが出来るが当時は電話では遠方へは半日以上待つ。）OBのおられる部隊へ電報で「ハコネヤマノボル」を打電した。

さて明けて１月２日３日の本選であるが、やはり他校との実力差は大きく又極度の緊張と環境の違いから体調を崩す者もいて本来の実力を発揮出来ず、残念ながら又も最下位の15位で終わり、応援して下さったOB・学生・父母等への期待には応えられなかった。しかしながら部員全員は皆悔いのない戦をしたと思っている。

以来四十有余年毎年「ハコネヤマノボル」の朗報を待っているが未だに届いていないのは残念である。

最後に防衛大学陸上競技部のさらなる発展を祈念して拙筆を置くことにする。


参加15校の最終エントリー
防衛大
ジロウト」までかり出す



七 人 の 侍

8期　中 山 篤 信



昭和38年、神奈川四大学対抗競技会、担当防衛大
前列：8期生「七人の侍」
中列：中央の5人は訓練部長、体育教室先生と顧問
左右の6人は2～6期の先輩方
後列：9～11期の23人（この他に4名いた筈）

写真前列、向かって左から

＊藤縄　祐爾：
副将。大会では投擲を除く短距離・フィールドの全種目にエントリー。得意は200m、400m。高跳びでは体重が重たそうだった。三浦半島一周駅伝に助っ人で出場した。
後日談に、あの頃から統幕議長向けのハードル越え、大跳躍の練習をしていたとか。

＊谷野　正芳：
箱根駅伝4区と3区を走る。軽快なスピード走法で得意は中距離。ロードの練習ではペースメーカー役をつとめたがスピードの上下に若手が苦労した。日頃の練習は全力でなかったが本番にはめっぽう強かった。娘が国体高跳びで入賞とか。

＊黒田　秀和：
200mの走りは最もダイナミックで、スパイクで豪快に土を飛ばしていた。400Rが一番楽しいようだった。後に空自実験航空隊のテストパイロットとして開発機の性能試験に冷や汗ばっかしだったとか。

＊中山　篤信：
主将。箱根駅伝6区と2区を走る。当時の防衛大の実力は、6区で中央大、横溝三郎と、2区で順天大、沢木啓祐と、その差いずれも12分であった。
現厚生労働大臣、尾辻秀久氏が中退の時、氏の「彼女」の申し送りがあったとか。

＊甲原　哲二：
箱根駅伝3区と1区を走る。中学から陸上競技をやってきた唯一人の本格派走者。
フォームが理想的に綺麗で、練習では省エネで走っていた。体重が軽く向かい風を苦手とし、よく腹痛を起こしていた。

＊猪瀬　優：
主務。三年生の時、箱根駅伝4区を区間12位の成績で走る。暗いなかトラックでよく走っていた。先に持久力、後にスピードをつけた小原台タイプの長距離走者。
当時から面倒見、口説きが上手で一年生の入部勧誘では確か15名ゲットの立て役者。

＊矢田　玄一：
生徒出身の変人スーパーマン。練習に来ない時は鉄棒の大車輪をしていた。サッカー部主将から100mの挑戦を受けて、ぶっつけ11秒1で辛勝した。四年生の後半、棒高跳びのグラスファイバーを買って貰ったが記録は伸びなかった。若い頃農業移民でパラグアイに渡ったが2～3年で帰国、現在埼玉で常人の暮らしをしているとか。

「箱根の予選会を振り返って」
昭和38年11月、小岩の栗本中学校から中川沿いに南下し瑞江中学校折り返しの10マイルコースだった。習志野駐屯地で食べた朝食が現地に到着した頃なんとなく腹に重かった。エントリーは四年生×4、三年生×4、二年生×2、一年生×2の12名だった。
一年生の力はもともと60分位であったから、二年生以上の10名が一人の例外もなくキッチリ実力通りに走る必要があった。
シード落ちの東洋大、東京農大、慶応大、立教大、防衛大のうち前4校は正月の箱根の実績からみて予約済みと思われていた。だから一つの空席を防衛大と横浜国大、横浜市大、神奈川大のいわゆる神奈川四大学の盟友校と東京学芸大の5校で争う展開と見られていた。試走時の平均タイム57分前後が出れば5位入賞はできると踏んでいた。
結果は一人の5分という大ブレーキが起こり、57分35秒のタイムで横浜市大に7秒差で敗れた。勝って10期、11期の何人かに一度だけでも箱根を体験させたかった。
後年資料を見て、この年は国公立大学のレベルで箱根の可能性を残す最後の3年間であったことを知った。11期生の昭和41年頃から無名の私立校が進出してレベルも急激に上がり、国公立が軒並み姿を消している。それからほぼ40年、益々難しい。



井坂先生



昭和38年、日米親善競技会
米海軍空母、USSレンジャー（6万トン）乗組員
米軍提供の賞品を日本側独占？　この後空母見学？
試合開始に当りLet's goと言ったら、皆が笑った



熱き箱根路の思い出（２年生時参加）

９期　齊　藤　公　則

１　入校（卒業）期日：S36．４．３（S40．３．20）

２　部員名（要員・専門・○印：主将、△：副将）

・満田　龍平（空・短距離・○）
・大西　徹彦（陸・砲丸投げ）
・元網　秀昭（陸・マネージャー）
・鈴木　和信（空・フィールド、短距離）
・青木　清史（陸・長距離）
・中薗　博文（陸・同上）
・前川　忠明（海・同上）
・齊藤　公則（海・同上・△）　　計８名

３　総括

当時の小原台は植林されて木々はあったが風を完全に防ぐほど樹木は大きくなっていなかった。グランドは元畑とかで風が強い日は砂埃が舞い目を細めて練習したこともあった。フィールドではグランドホッケー部が使用しており時々ホッケー部員がミスした球がトラックに転がり出て練習中の私達が踏みそうになる危険が生起した。その後グランドも整備されて又ホッケーボールが出ぬようネットが設置された。

主な試合は関東インカレ、神奈川５大学、箱根駅伝予選、横須賀市民大会等で目標は箱根駅伝であった。当時予選会の参加校は25大学位であり各大学とも10人の長距離部員を集め育てるのに苦労しており力が接近して毎年予選通過校がいれかわった。現在に比べて実現性があっただけ幸せだったと思う　（齊藤記）

４　思い出の記録

(1)　私にとって陸上部４年間は今思うと防大生活の全てで楽しかった。

入校時体力検定の1500mでたまたま先頭を走ったのがきっかけで誘われて入部したが、思い出せることを書きます。

１年の夏の合宿は長距離のみ期間を延長したのに私は高田部隊の医務室に寝ていた。何が原因で何日かも覚えてない。２年の時箱根予選会で出場が決まった時は涙が出るほど嬉しかった。

本番は箱根の下りを走らせてもらったが、ラジオで応援してくれた同期から「防衛大早くも遅れました」だけだったと云われ納得した。

３年のときは故障が多く「走っては休み」が続き悔しい思いが多かった。

４年のときの箱根予選20kmでは、折り返し付近で齊藤にハッパをかけられ眼が覚め、防大の先頭でゴールできたものの秒差で出場出来ず力が抜けていったのを思い出す。近年になって陸上部の同期と会うようになったが、当時の気分で気兼ねなく語らえるのが最高の財産だ。また、監督であった井坂先生が馬堀海岸駅の近くに下宿されており、休みの日はよく潜り込んだり、新婚なのに泊ったり、もう時効だがそこを拠点に制服を着替えて遊びに出かけたこともあった。このアットホームなところが辛い練習を４年間楽しめたと思う。　（中園記）

(2)　高校時代まで経験のない自分が、『走ろう』と決心して入った陸上競技を４年間やって、大会への参加から軽い故障などまでが体験でき、走ること（一見単純そうに見える）の難しさや選手の心理状態を多少わかっただけでも良かったと思っている。最近、還暦行事の一つとして息子と一緒にハーフマラソンを完走したが、気持ちはがんばろうとしても動けない体（年齢）になっているのを実感した。

（青木記）



(3)　２年生か３年生時代記憶は定かでありませんが、夏季合宿の校内グランドにおける酷暑日の出来事について思いでを記します。

当時、誰もやらなかった砲丸投げにただ一人、熱中していました。合宿ではまずアップの走りこみ、部員全員、一緒になって５、６周グラウンドの走りこみから入ります。体重90kgを超えていた巨体の私にとっては、別メニューであってもらいたいものの、本音を言い出せずに、長、短距離の仲間達に遅れまいと必死について行くのに精一杯でした。アップが終わると蓄積していた大半のエネルギーを完全に消耗しつくし、へとへとになっていました。アップを終え、疲れた身体に鞭打ちいよいよ砲丸を手にした自分の練習時間が持てると思っていたら、合宿の練習はそんなに甘くはありませんでした。さらにそれからが大変でした。

短距離走グループと一緒に、30～50mのダッシュを20～30本。もうこれで完全にグロッキーな状態、そして昼食、休憩時間へと続きます。当然、汗は出つくし、皮膚には汗が乾いて塩分が白くこびりついてるのが見える状態でしたから、食欲など沸きおこりません。しかし、食べねば午後の練習に耐えてゆけるはずもありません。

今日のように、スポーツ用食べ物、ドリンクもない時代でしたので、唯一これらに代わるものとして牛乳瓶（180cc）にはいった牛乳に着目したのでした。忘れもしません。飲むに飲んだり36本！

この話を同室の同期、彼は柔道部の部員で明治大学の連中と合同合宿をしていましたが、愕くことに彼は40数本飲んでいたと聞き、安心したり愕いたりした自分が昨日のように思い出されます。（大西記）

(4)　１年生：夏季合宿を陸自高田部隊で実施された。新潟の暑いのに驚き、加えて宿泊所が部隊の外で冷房が無く、かつ、蚊に悩まされた。しかし、6：00起床して朝練は近くの公園をジョッギングしたことが鮮明に記憶にある。２年生：なんといっても箱根駅伝の予選通過であり当時の報知新聞に参加大学の練習と抱負が掲載された。

練習の一環として馬堀海岸（当時は海岸）から正門までの長い坂のインターバル練習が10本～15本と行われた。足がガクガクでこれにはまいった!!

仕事を終えて帰宅する職員がバスの窓越しに見ており先輩は上手い手を考えたものだと痛感した。箱根駅伝本番を目指して練習したが、12月30日夜の選手発表は体調不良で補欠になりがっくり気落ちと疲れでしばらく何も手につかなかった。3・4年生：いずれもトータルタイムを10人で割ると一人数十秒の差で予選を通過できなかった。数秒の積み重ねの大事なことをこの時点で嫌というほど思い知らされた。

井坂先生には４年間親身なご指導を頂き大変お世話になり心から感謝申し上げます。艦艇勤務のため全国を転々としており約15年前「しらせ」艦上におこし頂きお会いすることができ御礼を申し上げました。　（齊藤記）

(5)　昭和36年入校の私ども９期生は、いずれの期も同じであろうが、１期先輩８期諸兄のおだてと執拗な勧誘にほだされ、入部したのが実情である。長距離の青木（陸：静岡）、齊藤（海：千葉）、中薗（陸：鹿児島）、前川（海：山形）、いずれもずぶの素人からの出発であった。結果的に言えることはこの四銃士、入校から卒業まで固い団結のもと、新たに増えることもなければ、辞める奴もなく、関東ローム層の砂塵とホッケー部の暴球に苛まれつつ、４年間小原台のグランドをただひたすら走り続けたのだ。自慢するほどのたいした成果はない。もちろん防大新などという恐れ多いリストに名前が載ったものもいない。実に平凡だったのだ。たまたま、先輩７期生が４年生（昭和38年正月）の時、憧れの箱根駅伝に参加するという栄誉を得た。当時私ども２年生は、ただ先輩から厳しく薫陶を受けて、怒鳴られるまま闇雲に走っただけであるが、幸いにも予選会をパスした。青木は９区、中薗は６区、実力№１の齊藤は、当日不調痛恨のリタイア、前川は、補欠であったが、その交代要員で当日８区をそれぞれ完走、栄光の防大陸上部の一時代を飾った。残念ながら私どもが４年の時は、数秒の差で箱根路を駆けることができなかった。

思い起こすに、かの馬堀中学校から防大正門までの長い坂道のインターバル練習、これほどきついものは、自衛隊訓練でもついぞ経験しなかった。きょうは何本だろうか、ああなんでこんな馬鹿なことをやるのか、起床から練習が終るまで、そのことだけが頭から離れなかった。しかし、この経験こそが、自分達の精神と肉体を今日あるものにしたのだということは、間違いなく、決して忘れ得ない。

“もみじ葉を砕きつ駆けた青春の
はるけく遠い小原の登坂”
（前川記）

10 期 の 頃

10期　芹 澤 詔 倶

10期が入校した１学年の時には、７期が率いる防大陸上部が２度目の箱根駅伝出場を果たし、防大は、いつも箱根に出れると簡単に考えていました。

しかし、８期、９期そして我が10期と、箱根駅伝予選では予選通過に必要な５位のチームに秒差の遅れで、願いはかなわず、悔しい思いをしてきました。

ともあれ、10期５人の少数精鋭の近況です。

①　河相　八紘

現住所：千葉市花見川区朝日ヶ丘3873-2-24-203

今の仕事：東京海上日動火災保険㈱

後輩への一言：箱根を目指してほしい。

近影：自宅で



②　菊田　慎典

現住所：横浜市港南区日野4-41-15

今の仕事：海軍戦史研究家

著書「坂の上の雲の真実」（光人社、2004年５月）

「日本海海戦一〇〇年目の真実」（光人社、2004年12月）

後輩への一言：短所を見るべからず、長所を磨け。

近影：自宅で



③　後藤　壮輔

現住所：つくば市千現1-20-30

今の仕事：㈶日本宇宙フォーラムで、将来の宇宙ステーションで実験することを目的として航空機や落下設備で無重力の実験をする先生達のお世話をしています。

後輩への一言：箱根駅伝で防衛大が走っているのをお正月に見れることを期待しています。私の経験を言わせていただければ、４年間本当に苦しかったですが、やめないでいたので、素晴らしい同期、厳しいが優しかった監督、コーチや先輩、黙々と頑張ってついてきてくれた後輩とお会いできたことと、その思い出が一番の財産です。

近影：パイロットと共に



④　芹澤　詔倶

現住所：三島市佐野107-8

今の仕事：東京海上日動火災保険㈱、せりざわ造園

後輩への一言：苦しみと相対してこそ人は成長するもの、大いにあがいてください。

近影：還暦のお祝いの席で



⑤　原　　充男

現住所：東京都板橋区徳丸3-41-12-306

今の仕事：三菱電機㈱顧問、北陸大学講師、㈶小野田自然塾評議員

後輩への一言：念ずれば花開き、行ずれば実は熟れる。

近影：30年前にルパング島から帰還された元陸軍少尉小野田寛郎氏とブラジルの小野田牧場で



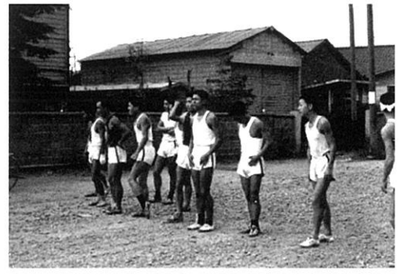




以下、10期の頃の写真



航空三羽烏（原、後藤、芹澤）（1963．9．8）



箱根予選の試走会（1963．11）



春の合宿最終日の日本平（1964．3）



夏の白樺湖合宿（1965．8）